

第 89 回公開シンポジウム

子どもに生命を開く動物絵本

◆ プレゼンター

矢 野 智 司

京都大学大学院教育学研究科教授／教育人間学

◆ パネリスト

武 藤 節 子

社会福祉法人子どもの家福祉会本山北町あすの保育園園長

◆ 司

会

一 色 伸 夫

甲南女子大学総合子ども学科教授／子どもメディア学

一色：第 89 回子ども学公開シンポジウムを始めます。本日は「子どもに生命を開く動物絵本」というテーマです。ピーターラビット、ミッフィー、ぐりとぐら、絵本にはウサギ、クマ、ネズミといった多くの動物が登場します。不思議なことには、人間が主人公の絵本よりも動物が主人公の絵本の方が圧倒的に多いのです。なぜ、これほど動物が絵本に描かれているのでしょうか。子どもが動物絵本を通して成長することを考えるとき、子どもには動物を必要とする深い理由があるのではないのでしょうか。この理由とは一体何かを考えてみたいと思います。プレゼンターで基調講演をしていただくのは、京都大学大学院教育学研究科教授、ご専門は教育人間学の矢野智司先生です。矢野先生のご略歴を申し上げます。京都大学を卒業されて、大阪大学、香川大学、そして京都大学の方にお戻りになられて、現在の職に就かれています。ご研究は現代思想、人間諸科学の成果を元にししながら学習と遊戯やスポーツ、贈与や供養といった、人間の変容や生成における創造的あるいは病理的な事象から人間とは何か、そして教育とは何かを、根本的に捉え直すことを目指して、ご研究をされています。そして、パネリストとして武藤節子先生をお招きしています。武藤先生は社会福祉法人、子どもの家福祉会、本山北町あすの保育園の園長先生で、今日は実際に保育園の子どもたちが絵本をたくさん読んでもらっているということで、先生に来ていただきました。

では、矢野先生お願いいたします。

矢野：京都大学の矢野です。今日は、タイトルにもありますように、子どもに生命を開く動物絵本についてお話をしたいと思います。人間と動物、そして子どもと絵本、それらがどのように関係しているかということを、お話したいと思います。

■【人が動物に惹かれる不思議】

皆さんが一日にどれぐらいテレビを見ているのかわかりませんが、テレビ番組には、ドキュメンタリー

番組やニュース番組として、実に多くの時間が動物の話題を伝えています。あるいは、家でペットを飼っている人も多いと思います。あるいは小学生のときに、イヌやネコを飼いたいと思った人は、このなかにも必ずたくさんいると思います。皆さんのもち物を調べると、動物のマスコットがあったり、ひょっとしたら動物文様の服を着ている人もいるかもしれません。

なぜ、人は動物に関心をもっているのか、とても不思議な感じがします。一般の方も来られていますから、きっと赤ちゃんを育てた方はよくご存知だと思いますが、赤ちゃんが最初に覚える言葉は何だと思いますか。もちろん親が教えるわけですから、まず「ママ」「パパ」を教えますが、程なくそれが言えるようになると、家でイヌやネコを飼っていたりすると、「ワンワン」や「ニャンニャン」という言葉を次に教えたりします。そしてしばらくすると、別にサバンナに住んでいるわけでもないのに、「ゾウ」や「キリン」といった動物の名前を教えます。なぜ、生まれて間もない赤ちゃんに、イヌやネコからゾウやキリンといった言葉を教えるのか、不思議に思った方がよいでしょう。

動物をペットとして飼うのは人間だけです。それは、私たちが自然から遠く離れた都市に住んでいるからペットを飼っているのだと思うかもしれませんが、アマゾンの奥地で生活している人たちもやはりペットを飼います。目の前にさまざまな野生動物がいるのに、ペットでサルを飼ったりします。ペットで飼っているサルは、食料として飼われているわけではありません。ここは重要なところですが、一度ペットとして飼った動物は食べないのです。ペットは家畜ではないのです。どうして人は動物を飼うのか、それは人間にとって動物なしでは生きていけない理由があるからです。それがどういう理由なのかを今日お話できればと思います。

■【人間と動物との関係を考える】

改めて、人間と動物の関係を考えてみましょう。まず動物から人間になるプロセス、ヒトから人間になるプロセスを想像してみましょう。事態を単純化して捉えてみます。段々と人間としての意識が高まって、道具を作り言葉を発するようになる。道具と言葉の出現は、翻って飛躍的に人間の意識を深めたことでしょう。言葉によるコミュニケーションを介した共同体ができあがる。共同体ができるようになると、周りに人間とは違う生き物がたくさんいることに改めて驚きます。動物を目の前にして、人間が自分たちはこの動物たちとどこが違うのか、まず、動物を見てこの動物たちは一体どこから来たのかということを考えると共に、その動物と違う私たちは一体どこから来たのかということを考え始めるのです。他の人間集団との関係も重要ですが、それとともに、クマやオオカミやヘビといった動物と自分たちとどう関係しているのかも重要です。さまざまな疑問をもち始めるのです。動物を狩猟し食べ物としつつ、旧石器時代の昔から、何万年もかけて、人間は動物との関係を考え続けてきました。

その説明がなされているのが神話です。動物という存在が人間にとってどれほど不思議な存在だったかは、神話のなかの人間と動物との関係の描かれ方を思い出してもらおうとよいです。神話のなかには、人間と動物との関係を描いた神話がたくさんあります（なぜ大国主命はウサギと出会うのでしょうか、八岐大蛇とは一体何ものでしょうか。昔話にも「鶴女房」「鼠浄土」のように動物がたくさん登場しますが、それはどうしてでしょうか）。古代の人間の思考というもの、動物が存在することによって生まれたと考えることも可能です。またいろいろな民族や部族が、自分たちの神話的な先祖を特定の動物だと

考えています。アメリカやオーストラリアの先住民の神話には、クマやヘビといった実にさまざまな動物を祖先と考える話が登場します。このような集団の象徴的な動物（植物の場合もあります）への信仰を「トーテミズム」と言います。

動物は宗教とつながっていて、人間と根源的な関係があると考えているわけですが（仏教では輪廻転生しますので、前世では自分は人間ではなく動物だったかもしれません）、そうではない宗教もあります。ユダヤ教、キリスト教といった一神教の宗教は、すべての存在は神が創ったわけですから、動物を祖先として人間が生まれるとは決して考えないのです。創世記によりますと、神はまず動物を創り、その後に人間アダムを創った。聖書のなかでアダムが最初に話した言葉は何かといいますと、動物の名前なのです。神がアダムに動物に名前をつけるように命じます。ですからアダムが動物たちの名付け親となります。ここでも動物と人間との関係の深さを知ることができます。キリスト教圏での人間の動物への支配権もこの話に由来します（楽園からの追放によって動物への支配権を失いますが、もう一度ノアの箱船の出来事のあとに、神から動物の支配権を与えられます）。人間が最初に話した言葉が、動物の名前だとすると、人間と動物は本当に抜き差しならぬ関係だといえます。

さらに動物との関係の歴史を考える上での重要な手がかりは、人間が初めて創った芸術作品はなにかを思い出すことです。現存しているかぎりでの人間の最初の芸術作品は、洞窟のなかの動物を描いた絵です。ラスコーの洞窟画などがそうです。そこにはバイソンやウマやシカの絵が実にたくさん描かれています。なぜ人間が洞窟に立派な動物を描いたのかと考えてみると、動物がもっている生命的な力に触れたいという思いが人間にあったのかもしれません。そして動物を大きく立派に描くことで、動物と出会ってそういう力を得ることができる考えたのかもしれません。一種の呪術的な儀式として動物を描き始めたと考えることもできます。でも人間の芸術活動の最も優れた痕跡が、動物の絵であることに、注意を払うべきです。

動物という存在を考えると、空には飛ぶ鳥がおり、海には泳ぐ魚がいる。人間は鳥のように空を飛ぶことができないし、魚のように海を泳ぐことはできない。あるいは、クマのように大きな牙や爪をもっているわけでもない。何かそういう動物たちは、人間と違うだけではなくて、人間以上の力を示している。鳥がいなければ、空を飛ぶということを人間がイメージできたかどうかわかりません。鳥がいるから飛ぶということがイメージできる。強力な力をもったクマがいるから、人間を超えた偉大な存在を人間が想像することができる。人間と似ている部分がありながら人間とは明らかに違う存在者が側にいることで、人間は現在の人間以上のことを理想として想像することができる。動物を介してイメージの力が飛躍的に拡張する。畏怖の念、聖なる感情、宗教的感情の起源も動物の存在と無関係ではありません。このように考えると、「思考枠組み」の創造から、「人間というアイデンティティ」の構築、そして「宗教」と「芸術」の生まれでる端緒、さらに現実を超えた人間の「理想」と「想像」の手がかり、……人間は、動物との関わりを通して、実にさまざまなものを考えてきたのだといえます。

このことがどういうことかを改めて考えるためには、一度、動物が全くなくなった世界を想像してみるとよいです。このような状況を想像することは難しいことですが、そういう世界を描いた作家がいます。フィリップ・K・ディックというアメリカのSF作家です。『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』（早川書房）

という奇妙なタイトルの小説を書いています。この小説を読んだことはなくても、映画は観たことがあるかもしれません。『ブレードランナー』というタイトルでハリソン・フォードが主演している映画です。未来世界が舞台で、酸性雨がずっと降っています。自然はすっかり破壊されていて、動物たちは死に絶えています。しかし、科学は発展していますから「レプリカント」（人造人間）をすでに作り出しています。その世界は動物がいなくて（人造動物はある）、人間と人造人間だけがいる世界です。この人造人間は、創られたものにもかかわらず偽の記憶をもっていて、自分が人造人間だということを知らない者もいます。犯罪を犯した人造人間を追跡する捜査官を、ハリソン・フォードが演じています。映画としても優れているので、一度見られるとよいと思います。

映画の原作の方では、ほとんどの動物が死にたえており、生きた本物の動物に何とかして手を触れたいという話がでできます。生きているものに触れたいという願いが、新しい宗教のような形をとって、動物信仰のようなものが生まれています。ほとんどの動物が死に絶えてしまったなかで、なぜ人間は動物に触れたいと願うのかというと、人間は動物という鏡を通してしか、動物でない自分自身を理解することができないからです。その自分たちの鏡であるはずの動物は失われている。他方で人間に似た人造人間たちがいる。自分自身が本当に人間であるかどうかがわからなくなっているのです。

動物という人間と違う生命の姿に出会うことで、人間は自分がどのような存在であるのかを知り（人間とは何かを知る）、動物がいることで、人間は自身を超えた生命、生きているものに触れることを可能にしているのです（人間を超える理想の手がかり）。そうだとするなら、動物の全くいない世界を想像することで、目の前に動物たちがただいることの圧倒的なありがたさが、理解できるのだと思います。動物というのは、人間にとって重要な他者、鏡になる他者であり、また同時に、人間を超えた生命の形に触れる大切な手がかりとすることができます。

以上が、動物と人間との関係を考えるための基本的な考え方です。これから動物絵本の話をしします。

■【動物絵本の世界】

もともと私は絵本の研究者でも、幼児教育の研究者でもありません。私の専門である教育人間学は、人間とは何かということを、教育の事象から考えていく学問です。ですから、子どもにとって大切なメディアである絵本には、前から関心をもっていました。でも本当に関心をもちはじめたのは、娘が生まれたときからです。娘が少し大きくなってきたので、本屋に行ってどんな絵本を買ったらよいだろうと思いい、いろいろと絵本を見ていました。そうすると、「赤ちゃんが初めて出会う絵本」という帯をつけている絵本がありました。その絵本がこれです。皆さんもご存じですか。これを見て「ミッフィー」と答えると違うのです。これはミッフィーではなくて、うさこちゃんです。ミッフィーとうさこちゃんとは違います。ミッフィーはこちらで、うさこちゃんはこちらです。顔の輪郭が少し違い、よく見ると耳の形も違うのです。出版されている本屋も違います。こちらは福音館書店でこちらは講談社です。作者はオランダの絵本作家、ディック・ブルーナという人です。

どちらにしても驚くべきことは、赤ちゃんが生まれて初めて出会う本が、ウサギの本だということです。かわいらしくて素敵な絵本だと思い、『ちいさなうさこちゃん』（福音館）を買って帰ったわけですが、それから何冊か絵本を買っていくと、どうもどの絵本も出てくるのは動物ばかりです。なぜ、赤ちゃ

んの絵本、幼児の絵本が動物ばかり描かれているのかと考えはじめました。これはたまたまそうではなくて、動物を描く理由があるのだと考えたほうがよいと思いました。そして動物絵本について研究を始めました。

まず典型的な絵本というよりは極限に近い絵本かもしれませんが、絵本を一冊見てもらいましょう。その絵本を通して、動物と子どもとの関係を話したいと思います。総合子ども学科3年の鈴木茉莉さんに、モーリス・センダック作、神宮輝夫訳『かいじゅうたちのいるところ』（富山房）を読んでもらいましょう。（当日は、鈴木さんに絵本を読んでもいただきましたが、ここでは簡単なあらすじだけを紹介します。なによりこの絵本を実際に見ていただければと思います。）

小さな男の子のマックスは、オオカミの着ぐるみをきると、家で大暴れします。お母さんは怒って、「このかいじゅう」とマックスを叱りますが、マックスも負けずに「お前を食べちゃうぞ」と脅します。とうとうマックスは、夕飯抜きで寝室に放り込まれてしまいます。するとどういふわけか、寝室に木が生えだしてきます。そして、天井が木の枝と葉っぱに隠れてしまうと、壁も消えてしまい、寝室はすっかり森や野原に変わってしまいます。そこへ、



どこからともなく、波が打ち寄せてきて、マックスのもとに船を運んできます。マックスはその船にのりこみ、夜も昼も航海し、そしてかいじゅうたちのいるところに到着します。マックスが上陸すると、かいじゅうたちは恐ろしい声で「ウオー」を吠え、歯をガチガチと鳴らして、目玉をギョロギョロさせ、爪をむきだしてきます。ところがマックスは驚いたり恐れたりしないばかりか、腹をたてて、かいじゅうたちに「しずかにしろ」と怒鳴りつけます。それから、かいじゅう馴らしの魔法を使って、かいじゅうたちを睨むと、かいじゅうたちはみな恐れ入ってしまい、マックスをかいじゅうの王にします。それからみんなでかいじゅう踊りをしたりして、月明かりの下で、祝祭のような沸騰した時間をすごします。しかし、「もうたくさんだ。やめ。」とマックスは命じて、夕飯抜きでかいじゅうたちを眠らせてしまいます。マックスは王なのに急に寂しくなり、お母さんの元に帰りたくなります。ちょうどそのとき、遠い世界の向こうから美味しい匂いが流れてきます。マックスは、かいじゅうたちの王を辞めることにします。ところが、かいじゅうたちは泣きながら「お願い、行かないで。俺たちは食べちゃいたいほどお前がすきなんだ。食べてやるから行かないで」と、マックスが帰るのを止めようとします。すごい声で吠え、歯をガチガチと鳴らし、目玉をギョロギョロさせ、爪をむきだすかいじゅうたちを尻目に、マックスは家路につきます。来たときと同じように船に乗り、夜も昼も航海すると、いつの間にやらお母さんに放り込まれた自分の寝室に到着。そこにはちゃんと夕飯が置いてあり、それはまだほかほかと温かったのです。

『かいじゅうたちのいるところ』は、とても有名な絵本ですし、映画化もされていますので、結構知っている人も多いのかもしれませんが。この絵本を描いたモーリス・センダックは、昨年亡くなりましたが、

アメリカを代表する絵本作家です。動物の話をしているのに、なぜ怪獣なのかと訝る人もいるかもしれませんが、「怪獣」というのは動物の野生性を強調した極限の姿だと考えてもらったらよいです。野生の世界のなかで一番向こうの果てにるのが怪獣なのです。

それでは絵本をゆっくり見直してみましょう。この絵本は少し不思議なつくりになっています。何が不思議かというと、普通絵本は絵のまわりにこのような余白を入れないのです。余白を入れて絵に枠を作ることは、物語世界のなかに入りにくくするからです。それでも枠をつくるのは、意識的にしていることです。このような画面の多くの部分を占める余白のなかで、絵の部分はとても小さな世界になっています。物語の世界とこの世界との距離をわざと大きくしているのです。この絵本はとてもうまく作られています。ページを開くごとに、段々と絵の回りの余白の部分が小さくなって、反対に絵を描いた画面の割合が大きくなっていきます。物語の世界が次第に拡張して、こちら側に向かってくるのです。そしてクライマックスの場面では、物語の世界が境界線を乗り越えて、こちらの世界に溢れ出てきます。

マックスは、絵本の最初の場面から動物の着ぐるみを着て暴れまわります。ここではマックスは動物になって、向こう側の怪獣の世界へと行くのです。マックスはいたずらをしたので、部屋に閉じ込められるのですが、ここでマックスの想像力によって（妄想力と呼ぶべきでしょうか）、部屋がどんどん変貌し、ジャングルに変わってしまう。このことを子どものイマジネーションによるごっこ遊びだとみることができます。この物語は、マックスが怪獣遊びをして、遊び込んでその世界にどっぷりとつかり、十分遊んだあとは遊びをやめて、日常の世界に戻ってくる遊びの物語だということもできます。

さて次のページを見てみましょう。今度は、文字の描かれている白い空間が、絵本の下側にきます。言葉の世界は人間の世界ですので、この文字が書かれている空間は人間の世界です。ところが、この言葉の世界も、ページを追うごとに次第に狭くなっていきます。そしてそれに並行するように、マックスは次第に怪獣世界に慣れ親しんでいきます。そしてとうとう怪獣の王になってしまいます。

このページがこの絵本の一番の山場です。見開きのページ全体が一枚の絵になっており、もう文字がない。余白もまったくなくなる。それまでは余白を作っていて、見ている子どもは怪獣世界から守られていた。見ている子どもと絵本の世界とが距離を取って守られていた。ところが段々と絵の世界が大きくなって、守っているはずの白い余白の境界線がなくなってしまう。物語の世界がこちらの世界へと溢れ出てきます。だから、子どもと一緒に見ているとわかりますが、ページを開いたことが、子どもが「あっ!」と驚く場面です。しかも文字がまったくない。あとで武藤先生がお話されることとつながると思いますが、絵本を読ませているときは、この文字のないところをどう見せるか、読み聞かせをするときの読み手の試練の場面だろうと思います。ここで読み手が「ウオー」とか怪獣の声をあげたらつまらない。どれだけしゃべらないで絵を見せるだけで我慢できるか、みたいなのだと思います。丁寧に読み聞かせをしていくと、文字がないことがかえって子どもの心に怪獣の大きな咆哮を響かせることになります。クライマックス、言葉がないのは、子ども（絵本を見ている子どもも一緒になって）が世界と一体化してその世界のなかに入りこんでいて、ここではマックスが怪獣そのものになっていることができます。エクスタシーの瞬間、私のなくなる「脱自」の瞬間です。

ところがマックスは寂しくなって帰りたくなる。ここが大事なところで、怪獣の世界のなかにずっと居

続けないで、帰ることが子どもの絵本の特徴というか、大事な教え、レッスンだと思います。言葉の世界が復活し、またそのスペースが大きくなっていく。しかもここでは、マックスは家に帰ろうとするけれども、怪獣たちは帰らさない。「待ってくれ」というわけです。好きだから、食べてしまいたいから行かないで。食べられるとどうなるかという、マックスは怪獣の一部になると考えられます。動物そのものになるのだと考えられます。そして帰りのときも、行くと同じパターンが繰り返されます。部屋に戻ると、寝室には温かな料理が用意されてあります。ここでマックスは動物の着ぐるみを脱いでいます。動物から人間に戻ろうとしている。こちらの世界からあちらの世界に行き、そしてあちらの世界から再びこちらの世界へと戻ってくるわけです。こちらの世界は言葉の世界、人間的意味の世界、それにたいして、あちらは言葉のない世界、意味の外の世界、人間世界の「外部」と考えることができます。

■【こちらの世界とあちらの世界】

このように多くの子どもの絵本は、行って戻ってくるという図式で作られています。行ったきりの子どもの絵本というのはまずないのです。こちらの世界に戻ってくるということが、大切なのです。こちらの世界とあちらの世界とを、自在に行き来することが大事なのです。あちらの世界が表しているのは動物世界です。あちらの動物世界は、こちらの人間世界とは違う規則によって成り立っています。こちらの人間の世界は言葉によって作られている意味の世界ですし、人間の規則や秩序によって作られている人間中心主義の世界です。私たちが普段生きている社会のことです。社会は人間の関係によって作り上げられています。人間の関係は基本的には「有用性の原理」、役に立つか立たないかの功利主義の価値観に支配されている世界です。世界は目的を実現するための手段になります。だから私たちは、他の人たちと会っていても、その人そのものと出会うことより、この人は目的の実現にとって役に立つかどうかを判断している。また自分も絶えず他者からそのような目で評価されている。それに対して、あちらの世界は動物の世界、言葉のない世界です。役に立つかどうかということを超えた世界、つまり無用の世界、意味世界の「外部」を表しています。

同じ主題の別の絵本を取りあげてみましょう。この絵本は『おなかのすくさんぽ』（福音館）という片山健さんが描いた絵本です。小さな男の子が森にやってきます。森は人間を超えた野生の世界です。西欧の昔話を見てもわかるように、森は人間の世界ではありません。この子どもは洗いたての白いシャツ（野生と反対の文明の象徴）を着て動物世界にやってきます。子どもは動物世界で、どろんこになりながら動物といきいきと交わり、次第に動物化していきます。これは「動物になっている」ということができます。動物の仲間になるとはどういうことか。くまが「ちょっとだけ なめて いーい?」と子どもに聞きます。そして子どもの体をペロペロと本当に舐め始めます。「くまは ペロりと いっかい なめました。それから ペロ ペロ ペロッと さんかいなめると、すばやく もう いっかい なめました」。どうもこの子どもは美味しそうだということになります。このような野生の力に満ちた優れた絵本が、世のなかにあるものだとは本当に感心するのですが、子どもは動物たちに食べられそうです。子ども危機一髪というわけです。「ゲー ゲー ゲー」と動物たちのお腹がなってきます。もう食べられて終わるのかと案じていると、男の子のお腹がもっと大きな音で「ゲー」となるので、動物たちは「エへへへへー」と言って帰っていく、というお話です。話の基本的な構造はセンダックの絵本と一緒だといえます。こ

の絵本は、これまで作られた絵本のなかで、最も深い強度で野生の生命を描いた、秀逸な絵本だと思います。

こちらの世界からあちらの世界に行って、あちらの世界からこちらの世界に再び戻ってくる。あちらの世界はこちらの世界と違って、言葉を失ったときに怪獣になるというところが、前のところでの一番のポイントです。怪獣になるとはどういうことかという、エクスタシーの瞬間を生きることです。普段人間が



生きているように、世界と距離を取って生きるのではなくて、世界との境界線が溶解して、世界と一体になることです（このような体験を社会学者の作田啓氏は「溶解体験」と呼んでいます）。怪獣とともに生きたあの場面、あの瞬間の絵を見てもらうとわかりますが、子どもは世界と一体になって生命の声を発する。そのときは「私」というものがなくなってしまう。動物になるということは、人間と世界、人間と人間というように境界線で区切って生きるのではなくて、境界線が溶けて一緒になってしまうような瞬間を生きていることです。そのときの世界は、こちらのような有用な役に立つか立たないかのような世界とは違う世界です。それは人間はなぜ遊ぶのかということと関係しています。

私たちは、基本的には、こちらの世界である人間社会に生きています。社会のなかでは、役に立つ人生を生きなればいけないので、自分と世界との間に区切りを入れて仕事をするわけです。役に立つ生き方は、自分もまた役に立つかどうかで他者から評価されるわけですから、たいへん苦しいことでもあります。それは幼児であっても基本的には一緒です。そういう役に立つということを一度否定して、世界と一体化する体験を、人は生きようとするのです。ですから、なぜ人が仕事の世界と共に遊びの世界を生きているのかというと、仕事だけでは人は生きていけないようにできているからです。仕事が食べていくために必要なのは、古代から決まっていますが（狩猟採集から農耕文化になることで労働時間は長くなったといえます）、同時に人間は有用な仕事をすると共に、遊び、歌い、踊りといったように、役に立つこと以外のことをしていました。芸術がその典型です。

それは幼児であろうと、大人であろうと、基本的には変わりません。幼児も、一方でこちらの世界、社会のなかで生きないといけない。言葉の世界できちんと言葉を学ばなければいけないし、人間化への道を進み発達もしなければいけない。幼児は幼児なりにたいへんな世界を生きているわけです。しかし、それだけではなくて、言葉を学ぶと共に、もう一度言葉のない世界を生きていることができる。怪獣たちのエクスタシーの瞬間を見てもらったらわかりますが、子どもは吠えているだけ、あるいはうなっているだけ、「おー」とか、「あー」と言っているだけです。考えてみると、私たち大人も、本当に感動をしたときというのは、言葉を失ってしまい、ただ「おー!」とか「あー!」と言うしかなくなります。本当に美味しいものを食べたら、まず「おー!」と言って言葉を失います。そのあとで言葉が追いかけてきて、「まったくとした味なのに、しかしそれでいてすっきりした口あたり」（一体どんな味なのでしょう）

と言ったりして料理を批評するわけです。食べた瞬間に本当に美味しくて感動したら、「おー」とか「あー」とかしか言葉では言いようがない。だから怪獣と一緒に踊っているときには、「おー」とか、「あー」しかないのです。しかし、「おー」とか「あー」とかだけで生きているわけにはおれない。「おー」とか、「あー」とか言いながら、宇宙に溶けたり、怪獣と一緒にになって踊ったり、それがどれほど深い歓びであっても、それだけでは十分ではない。その世界のなかで、十分に踊って、吠えても、その後で必ずこちらの世界に帰ってこなければいけません。

もう一つ別の絵本を見てみましょう。マリー・ホール・エッツの『もりのなか』（福音館）という古典的絵本です。色彩の豊かな絵本が多いので、あまり見かけることはないかもしれませんが、この絵本は白黒で描かれた優れた絵本です。この絵本も、小さい男の子が一人で森に行きます。森のなかで次から次へとさまざまな動物に出会います。出会った動物たちと列を作って行進して、そのあとで動物たちと楽しく食事をします。絵本のなかで動物と食事をする場面というのは、『ぐりとぐら』（福音館）の絵本を思い出してもらうとよいのですが、とてもステキな瞬間です。子どもが大好きな場面です。

この絵本はどの場面をとっても印象深いのですが、とくによくできているのは、最後の場面です。食事のあとで、男の子は動物たちとかくれんぼをします。男の子が隠れている動物を探し出そうとすると、いつの間にかお父さんがやってくる。お父さんはこちらの世界の代表者です。大人の世界というより社会の代表者です。子どもが動物たちと遊んでいたと言うと、お父さんが「だけど、もう おそいよ。うちへ かえらなくちゃ」、そして「きつと、またこんどまで まっててくれるよ」という。ここがこの絵本作家の優れているところです。お父さんは、子どもがあちらの世界に十分に生きたことを祝福します。でもお父さんはこちらの世界の住人ですから、一緒に帰ろうといひます。動物たちは待っててくれるよと話をし、二人はこちらの世界に戻ってくるわけです。『かいじゅうたちのいるところ』は野生の力に溢れていますが、それと比較すると、このエッツの絵本では静謐で深い愛に満ちた世界が描かれています。でも基本的な原理はまったく同じで、子どもがあちらの世界に行き、そしてこちらの世界に戻ってくるのです。

■【二つの世界を見るレッスン】

動物絵本の世界をいくつか見てきました。なぜ絵本に動物が描かれているか結論に向かいたいと思います。幼児は動物性（世界と溶けたあり方）を脱して（否定して）、「人間」にならなければなりません。どこまでも有能性を高めて、発達しなければいけない。そして成熟した大人にならなくてははいけない。これはこちらの世界での人間の課題です。大人であるとは、こちらの世界でしっかりと生きることです。生きているさまざまなものとのつながり方を、生きているものと出会って、そのものに触れて、その生命のうちに溶けるような生き方を、断ち切ることです。少年期の子ども向けの本には、動物との出会いだけでなく、動物と別れる話がたくさんできます。アニメ『あらいぐまラスカル』（原作はスターリング・ノース『はるかなるわがラスカル』小学館）の話もそうですし、『子鹿物語』（偕成社）の話もそうです。動物と別れることは、あちらの世界と別れる話ということです。子どもであることから大人になるということは、あちらの世界と別れること、生命世界と別れることを意味します。大人になったと自分が自覚するときには、何か喪失感があるのはそのためです。ですからノスタルジーは、この失われた幼年時代

の生命体験と深く結びついています。

生まれて間もない幼児には、自分の力でコントロールできる世界の幅はとても狭いものです。そういう狭い世界のなかで、幼児はたえず生きている実感や喜びを、日々体験していく必要があります。そのような体験はどこから来るのかというと、あちらの世界の生きているものに触れることによってです。幼児の教育が、なぜ遊びを中心にしてきたかという、遊びはあちらの世界に触れて、こちらの世界に帰ってくる、という基本的で根本的な体験を安全にもたすからです。だからこそ、子どもがあちらの世界の生命性に支えられながら、こちらの世界で有能性を高め、人間になっていくことができるのです。そのように考えると、動物絵本というのも、子どもにたいして、あちらの世界がどのようなものを体験させるだけでなく、こちらの世界とあちらの世界との往還運動のレッスンをしているということも言えそうです。

先ほど大人になるというのは、あちらの世界との絆が切れることだとお話しました。しかし、実相はそれほど簡単な話ではありません。大人になって本当にあちらの世界から切りはなされてしまうと、生きている実感も失われてしまいますから、子どものような形ではないのですが、大人になってもやはり生命世界に触れる必要があるのです。深い形で生命世界を現している芸術や宗教は、この延長線上にあります。そして、動物との交流も、子どものときのようなものではありませんが、生き続けます。大人になって、なぜ水族館や動物園に行ったりするのか自分で不思議に思いませんか。皆さんのなかにも、今でもそういったところに行くのが好きな人もいるでしょうし、家に帰ったら愛犬や愛猫がいるかもしれません。動物を象った置物やマスコットやぬいぐるみが、部屋のなかにまったくないとは思えられません。それはあちらの世界からの風、生きた生命の風のようなものに触れないと、人は生き続けることができないからです。人間はそうようにできているようです。

皆さんは、これから幼児教育の現場に観察や実習で行くことがあるでしょう。そこでかいじゅう踊りの場面のように、子どもが我を忘れて遊んでいたり、踊っていたりする姿に遭遇するかもしれません。あるいは真剣に動物の絵本を読んでいる姿を見るかもしれません。そういった姿を観察し考察するとき、「発達のため」といってこちらの世界の基準で、すぐに判断し理解するのではなく、子どもが二つの世界を往き来して生きているからだと考えようになると、これまで見えている世界と違う人間の生命の奥行きのようなものが、見えてくるようになるかと思います。そしてそのとき、自分自身もまたこの二つの世界を往き来して生きていることに気がつくはずで、私もまた二重の世界を自在に生きる存在者です。

普段、このテーマは何時間もかけて話をしています。今日は時間が制限されているために、十分に説明することができなかったかもしれません。お渡ししております資料は、少し難しいかもしれませんが、最後まで読んでいただけると、説明の足らなかったところなどがわかっていただけたと思います。また関心があれば、参考になる本もいろいろとありますので、読んでいただければと思います。それでは、これで終わりいたします。

一色：矢野先生、どうもありがとうございました。人間とはどのような存在なのかということを非常に根底から動物絵本を基にお話していただきました。では、続いて武藤先生にお話していた

できます。よろしくお願いいたします。

武藤：本山北町あすの保育園の武藤と申します。よろしくお願いいたします。今の矢野先生のお話をとても興味深く聞かせていただきまして、多分、子どもが発達する、人間になるという課題の中で生きていて、それだけでは十分ではなくて、動物になる、また有用性、無用性の範疇を超えて世界と一体となるということが生きる時間とか、生きる喜びにつながっているのではないかと解釈しました。とても面白いお話だったと思います。このようなお話を伺うのは初めてでしたので、とても新鮮で、勉強させていただきました。

私の立場からは、動物になるというのは、人間の本質に向かって開かれているという方がしっくりくるような気がします。子どもたちを見ていると、子どもたちの健やかな成長発達は生きる喜びとか生きる深さに対して、常に開かれてそこにあるという方が望ましいのではないかと考えるからです。子どもは成長発達の過程において発見とか喜びとともに、さまざまなことに傷ついたり、さまざまなことを諦めたり、余分な概念とか知識とか余分な感情をまとって本来持っている健やかな心を少しずつ曇らせていくということも起ります。その健やかなところを曇らせないことが、人間の本質に向かって開かれているということだと私は思って、それは先生の言われる動物になるということと通じているのではないかと思います。ながら聞かせていただいております。

私は子どもには健やかに成長発達をしてほしいと考えていて成長発達の中で、健やかな心を曇らせないで、いつでもそれを生き生きと持ちながら生きていける人になって欲しいと願っていますし、それは十分可能なことだと思います。私としては、動物にならなくても、子どもは健やかであるというのが本来の姿だと思っていますので、その点は解釈の角度が少し違うのかと思いました。そのようなことを考えながらお話を聞かせていただいていた、大変興味深かったです。そして私なりに、子どもはどうして動物絵本に惹かれるのかということを保育現場で見てきたことから考えてお話させていただきたいと思います。まず一点目として、子どもと動物は共通点が多いということが言えると思います。保育園で特に小さなクラスの子どもたちを見ていましたら、同じ生命体という意味で、動物にとってもよく似ているということを思います。そして、人間も動物であるということを改めて思います。0歳児の赤ちゃんたちが、今うちの保育園には9人いるのですが、保育室の中であちらこちらをはいはいして移動している姿はオットセイのようで本当にかわいいです。はいはいと移動をして目的地で目的物を口に入れたり、舐めたりしては、また移動をします。もちろん言葉はありません。先生の先ほど言われていたように、時々「うー」とか「あー」とか「おー」とか言ったりして、そして、笑ったり泣いたりします。快と不快の分類での表現がわかりやすく、とてもシンプルですが、快と不快以外の表現とか表情は曖昧で漠然としていてそういうところは霊長類の動物に近いと思います。赤ちゃんの時期を卒業した子どもたちもそれぞれに生活習慣の自立とか社会性、コミュニケーション、愛着行動などにおいて、動物的な要素をたくさん感じます。まず、共通点による親近感というのが、子どもが動物絵本が好きな要因の一つに挙げられるのではないかと思います。

そして、2つ目に、子どもは動物に共感するということ言えるのではないかと思います。子どもた

ちは動物と遊ぶのはとても好きで、おままごとでは犬は大事な家族の一員で、私の保育園では、生きた動物は飼っていないのですが、私が作った実際の小型の室内犬ぐらいの犬が4匹いまして、子どもたちはそれをとてもかわいがっていて、おままごとで散歩をさせたり、ご飯を食べさせたり、一緒に寝たりお風呂に入れたりしています。そして、おままごとの中で、子どもが自ら犬や猫になったりもします。お母さんとかお父さんとかお姉さん、赤ちゃんという配役以外に犬や猫も人気の配役で、時には、おままごとの家族がお母さんと犬ばかりということもあります。犬や猫になった子どもたちは四足で歩いて、ごろごろと遊んで、とても楽しそうです。私も子どもたちとおままごとをする時は、とても楽しいので、よく犬や猫になります。犬や猫になると何が楽しいかというと、一番自由で一番のびのびできるのです。気を使わなくてもいいですし、好きなことをしていればよくて、時々飼い主の人間にたしなめられますが、のびのび自由に生きる楽しさは格別なものがあって、子どもたちはのびのび自由なことが大好きですので、そのようなところに共感したり、惹かれたりするのかなと思います。2番目の動物の自由さ、伸びやかさへの共感というのも動物絵本が好きなことに繋がるのではないかと思います。

そして3番目に絵本に出てくるのが動物だから安心で、安心を基にわくわくどきどきの体験ができるのではないかと思います。子どもたちは絵本を読んでもらいながら物語を体験しています。喜んだり、怖がったり、悲しんだり、ほっとしたり、子どもたちの表情をみていると、ただお話を聞いている、絵本を見ているというだけではなくて、体験としての時間がそこにはあるというのがよく解ります。その絵本、物語が動物による展開ということで物語と現実世界が混同してしまわず、子どもたちは安心してその世界を体験することができます。例えば、「狼と7匹の子ヤギ」では、子ヤギが食べられてしまっ、最後に狼が井戸に落ちて死んでしましますが、動物であるから追体験が可能だと思います。また、ヤギと恐ろしい Troll が橋の上で戦う「三匹のヤギのガラガラドン」などでも同じことが言えます。動物であるからこそそのストーリーの展開と動物であるからこそ、子どもが絵本の世界を安心して体験できるのだと思います。絵本を通しての体験はこのように食べられてしまうようなストーリーばかりではなくて、数限りなくすばらしい物語があって、子どもは動物たちと一緒に絵本の中で身近な出来事を生き生きとした視点で捉え直したり、また現実にはないファンタジーの世界を自由に楽しんで体験したりします。絵本で言えば「ぐりとぐら」とか「かばくん」とか先ほども紹介していただいた「もりのなか」「小さなねこ」「ぞうくんのさんぽ」「三じにおちゃんにきてください」また「バルバルさん」とか「うみやまがっせん」などわくわくする楽しい動物絵本は数限りなくあります。安心して体験できるための動物ということと、動物だからこそ物語が多様にそして大きく広がっていくということが言えると思います。動物はそういうわくわくどきどきの物語の導き手として最適ではないかと思います。

そして、最後にもう一つ、動物だから解りやすく解りやすさを元に生きる知恵と真実を伝えることができるということを考えます。動物自体がその姿形で、個性や性格を表現している場合が多いので、子どもにはそれらがわかりやすいのではないかと思います。人間ですと、絵とか文章の表現で怖そうにとか強そうにとか優しそうにとかずるそうにとか正直そうにとかいろいろ示すことができますが、それでも人間は多様です。でも動物は、それぞれの個性や性格、特徴を表現しているという傾向が顕著です。象徴としての動物の特性を参考にしながら、子どもにはどんなイメージがあるのか考えてみた

ので、いくつか挙げてみます。まず、犬は人間の最もよい友とされ、忠実でやさしく暖かさを持っている。猫は、しなやかで優美な形から女性的なものとされている。狼は男らしさの象徴、ライオンは王権、勝利の象徴、サルは動物の中で最も人間に近いもの、根源的な力の象徴、そのように表されています。子どももその動物の姿や特性から、普遍的なイメージを持って、絵本を楽しむことができるのではないかと思います。

そして、もう一步進んで考えれば、動物はファンタジーの世界、物語の世界で体现している特性を通して、また、体现している特性を生きるという物語を通して、さまざまな真実や知恵を伝えてくれます。例えば、「三匹の子豚」は本来のストーリーを甘く作り変えたものが出回っていますが、本当の「三匹の子豚」は1匹目、2匹目の豚は狼に食べられてしまって、一番下の豚は利口に狼をだまして、煙突から落ちてくる狼をぐつぐつ煮て食べてしまいます。そして、裏表紙のところでは、部屋に狼の毛皮を敷いてその上でゆうゆうとくつろぐ豚の姿が描かれています。正しく、真実と知恵です。真実や知恵は、知識として学習したり、切り取って教えることができにくいことだと思います。それは、物語を通してこそ伝えられるものではないでしょうか。物語を通して、子どもたちの心の奥深く、じわじわと染み込むように蓄積されていく、それが生きる力に繋がると思います。その導き手として動物は子どもたちにとって、最適であるということが言えるのではないかと思います。

以上です。どうもありがとうございました。

一色：武藤先生、どうもありがとうございました。ポイントとして、子どもも動物も共に似ている、子どもは動物に共感する、動物だから安心、そして生きる知恵と真実、とても具体的なお話をいただきました。矢野先生これに対して、先ほどのお話を含めてコメントがあれば、お願いします。

矢野：昔、ごっこ遊びについて研究したとき、アメリカの遊び研究の論文を読むと、ペットの役というのは比較的低い役だということが書いてありました。20年ぐらい前に、ごっこ遊びを観察していたときには、ペットという役自体がほとんどなかったですね。今のお話を伺っていて、日本ではペットの役の評価が高いというのは意外でとても面白いと思いました。

武藤：犬や猫になるのが好きで、クビにロープを巻いてしまったら絞まってしまいますので、首にロープを巻いてはいけなくなってしまうと、子どもたちは紐を口にくわえてそれで引っ張ってもらって散歩をしています。ペットというより動物の仲間としての位置づけかと思います。

一色：武藤先生や矢野先生のお話を聞いて、もう少し、この辺りはどうなのかというところ、例えば、動物絵本というそれが一番ベースとしてなければいけないのか。もう少し、違う視点でもお話をされていました、子どもたちにとって非常にすばらしい環境は動物以外にもいろいろあるのではないかとのお話がありました。

武藤：それについては、保育の話になると思うのですが、あちらの世界、こちらの世界ということ、動物絵本は役に立って大事な役割をしていると思いますが、動物絵本がなくても、本来、子どもは自分の中にあちらの世界とこちらの世界を併せ持って生きているものだと思っています。そういうことを捉えて、保育をしています。保育する者がそういう観点で子どもたちを育てているということです。

一色：あちらの世界とこちらの世界というところが一番大元にあればいいのではないかというお話ですが、矢野先生いかがですか。

矢野：お話をしましたように、あの動物絵本の構造は、基本的に遊びの構造と同じなのです。ですから、別に動物絵本以外にも、遊びという媒介（メディア）を通して、あちらの世界へ行くことができます。重要なことは、子どもが自然にあちらの世界へ行けるのではなくて、その行き来を作りあげる遊びの形態とか、遊びのメディアみたいなものが、必要だということです。そういう優れた媒介をもつことによって、子どもはあちらの世界に行くことができる。たしかに小さな子どもだったら、単に体を使っているだけで楽しいです。でも段々と成長してくると、あちらの世界へと移る通路となるようなものの媒介が必要になります。道具が媒介したり、物語が媒介することで、あちらの世界へより深く入っていくことができるようになって考えられます。ですから、幼児教育では、媒介するものを、園のなかでどのように選択して配置するかということが、重要な課題になってきます。例えば、小さい子どもだったらぐるぐる回っているだけで楽しかったりしますが、段々と成長すると単にぐるぐる回っているだけではつまらない。複雑なダンスとカリズムとつなげたりするようになります。そうすると、あちらの世界と入っていく深度がより深まっていきます。このことは、幼児のレベルに留まらず、大人になっても同じです。大人になったら、文化や芸術がそのような媒介になって、より深い形であちらの世界に触れることができるようになります。幼児のときのようなものでは、もう楽しめない、深く入りこむことができないのです。その媒介していくものを、どのように選択し、どのように身につけていくのかは、自己形成にとって重要な課題だと思います。

幼児教育に戻ると、あちらの世界への通路を開くのは動物絵本だけではなく、さまざまなものがあります。ただ、動物と人間との関わりという人間的課題に関わるのは動物絵本です。また特に動物との実際の関わりや、動物の絵本や物語が、とても重要になっている時期がどうも人間にはありそうです。小学2年生や3年生あたりに、イヌやネコを飼いたいと強く願う時期があります。なぜそういう時期があるのかと考えると面白いと思います。

武藤：おっしゃった通り、遊びを通して、あちらの世界、こちらの世界の行き来ができるというのは、子どもの特質であると思いますし、ただ、先ほども申しましたように、一人の子どもの中にあれがあって、言い換えれば、こちらの世界というのが、例えば建前の世界であったり、あち

らの世界が本音の世界であったり、言葉を持ってないけれども、たくさんのエネルギーが詰まっています、たくさんの本心が詰まっている世界であるとすれば、その壁はないほうがいいかと思って、私としては、その丸が繋がってあるのが、子どもの健やかな発達かと考えていて、そのところは現場にいる者として願っていることかと思います。

一色：ありがとうございます。実は今日は12時にお二人の先生に来ていただいて、事前の打ち合わせをしている中で、総合子ども学科の西尾先生もそこにいらっしゃったので、コメントを伺いたいと思います。

西尾：矢野先生、武藤先生、どうもありがとうございました。先生方のお話をたいへん興味深く聞かせていただきました。矢野先生は子どもだけではなくて、大人自身もあちらの世界、こちらの世界を行き来していくことの重要性をお話になられたかと思うのですが、私自身の話になりますが、子育てを始めて、最初に思ったのが、子どもは本当に野生だということです。子育てをする中で子どもを通して、私自身の中のある野生の中に触れていくという経験をしたことを憶えています。ということは、当然、ここにいる学生たちは、保育者としてこちらの世界を生きると同時に子どもを通して、子どもの中にあるあちらの世界にまた触れていく、それを通して大人自身か或いは、保育者自身があちらの世界とこちらの世界を行き来することもあるのかと思いました。

矢野：メディアとして絵本が大事なのは、絵本は大人が買って来て子どもへとプレゼントされる点です。そして、大人が子どもに読んであげる。そのときに絵本がもっている力は何かということ、子どもと大人をつないでいく媒介物になるだけではなくて、一緒に読むことで、大人自身も変わっていくことです。先ほど『もりのなか』の話で、お父さんが最後に登場する話をしました。これは大人を変容させるための絵本でもあります。お父さんが最後のところで、子どもの森のなかでの経験・体験を肯定します。「きっと、またこんどまで まっててくれるよ」と最後に書いたので、作者は続編の『また もりへ』（福音館）という絵本を作ります。この絵本も前作に劣らず優れたものですが、こちらの方でも最後の場面にお父さんが登場します。子どもの健やかな生命の奥底から湧き上がる笑いを見て、お父さんは自分もお前みたいに笑ってみたいという言葉で終わります。何が描かれているかということ、大人が子どもを通して、あちらの世界に触れることの大切さが描かれているのだと思います。

子育てをしていて一番面白いことは、子ども自身が過剰な生命体だし、子どもが関わる絵本などがすべて生きているものに触れる喜びを描いていて、子育てのなかで親も知らないうちにあちらの世界とつながってしまうことです。人は人生で少なくとも3回は動物園に行くと言われています。子どものときには親に連れられて、親になったときには子どもを連れて、そして、おじいさん・おばあさんになっては孫を連れていく。子どもが動物に触れて喜んでいる瞬間を見ることに、大人の喜びがあるのだと思います。そういう意味でいうと、動物絵本のようなメディアがもっている力、子どもが大人に与えてくれる力は、

大人があちらの世界に触れる上で大きいだろうと思います。私は、自分の子どもを通してしか経験はありませんが、日々子どもとともに生き実践されておられる武藤先生の経験は、もっと大きく深いものだろうと思います。

武藤：先ほど、大人が行き来する重要性ということをおっしゃってまして、私は保育の仕事をしていたら、子どもは子どもでうまく説明できないことがたくさんあって、年齢が小さければ小さいほど何がどうなっていて困っているとか、何がどうなっていて悲しいということを説明できないし、子ども自身もそれを漠然としか感じていないことがよくありますので、それこそ、あちらの世界での感性をずっと働かせて、子どものことをわかってやるのが仕事の大きな役割だと思っています。子どもの言葉ではなくて、身体の声とか、心で感じている声を聞くということをやっと仕事にしてみましたので、自分はあちらの世界の人間で、こちらの世界がたいへん難しく、あちらの世界の者だと思っています。

一色：ありがとうございました。小野寺先生、いかがですか。

小野寺：矢野先生、武藤先生、今日はどうもありがとうございました。伺っていて、お二人の先生のお考えの基本的なところに、認識の違いはどこにあるのかと考えてみましたら、動物絵本の定義、この定義の仕方が矢野先生の場合は、人間と子どもと動物の世界、行ったり来たりするような図式の中で描かれている本を動物絵本とおっしゃっているし、武藤先生の場合は、必ずしもそうではない。武藤先生の立場からすれば、別に子どもはあちらの世界に行かなくても、本来しっかり持っている、赤ちゃんというのはとても動物的なものだから、あちらの世界に行かなくても、あちらの世界は世俗的に体験しているという違いがあるかと思います。矢野先生のお話ではあちらの世界とこちらの世界を分けるのは、基本的には、遊びの世界と労働の世界である。言葉でもって、有用性の世界を作る。働き自分たちの生活の糧を得ながら生きる苦しみの世界がこちらの世界、そこから解放された遊びの世界があちらの世界なのだというお話でした。そういう設定というのは、いろいろなところで、このような考え方は人間性の回復というのが論じられる時にはとられる図式でありまして、そういうような動物絵本というのが、矢野先生がおっしゃっているのは一つの例として、おっしゃられたと思います。今の若い人は、知らないと思いますが、「フーテンの寅さん」という人がいまして、山田洋二監督の何十作にもものぼる作品がありまして、私も大学院時代からずっと見ていました。それは、あちらの世界でもあるし、こちらの世界でもあるし、行ったり来たりするわけです。そして、おいちゃんとか妹とかあちらの世界、つまり遊びの世界、正業というよりも、そういう遊びの世界です。遊びの世界というものを先ほどセンダックの『かいじゅうたちのいるところ』とかを喝采と論じるのは、妥当性を欠いているかもしれませんが、あちらの世界というものはまともに生きている人にとっては、おいちゃんや妹にしっかり帰って来いとたしなめられる世界なのです。そう見ると、こちら側からあちら側を見た場合にほっとす

る。ほっとするけれども、あちら側にいる世界をこちら側にいる人間は、必ずしも理想的な世界とは描いていません。寅さんは、そういうところでいうと、自分のところに葛藤があって、いつか真面目になろうと思っている。結局、あちらの世界、こちらの世界を立てて話を論じるということは、結局、その中で結論的には、幼児にしろ大人にしろ、豊かな世界を重視させようということができる。そういうことがそれなりに言葉としてはわかっているのですが、帰ってきた時に豊かな世界というのが、豊かな内容がどういうものなのか。その辺りを教えていただければと思います。

一色：では、豊かな世界の内容とはということでしたが、いかがでしょうか。

矢野：あちらの世界で体験されるのは何かと考えると、お話ししたように「溶解体験」と呼ぶことができるような、主体と客体の境界線、私と世界との境界線が溶けていくような瞬間を体験するのだといえます。それは、センダックの絵本のクライマックスの場面に描かれている言葉のない世界が出てきた時に説明したように、世界の内の溶け込む脱自の体験です。意味によって作られている人間世界（言葉の世界）の破壊（侵犯）によって、そのような体験が生起します。その「体験」のあとで何かが豊かな「経験」として残るという意味合いでの効果は考えないのです。ただ、実際には、遊びなどは典型的にそうですが、遊びをすることによって、結果として、何か発達に関わるような実際の有用的な効果をもたらされはします。それはあちらの立場から見れば二次的なことです。幼児は自分がより社会的になるために、身体を丈夫にするために遊んだりするわけではないです。幼児教育は、遊びを発達のための手段のように考える傾向がありますが、子どもは遊び自体が比類ない喜びをもたらすから遊ぶのです。遊びがもたらす発達の価値だけでなく、遊びの体験自体が、一つの価値として考えることができるようになればと思います。

一色：どうもありがとうございます。では、ここで第一部を終了いたします。

【休憩】

一色：それでは、第二部を始めます。今日は第一部で学生のコメントがもらえなかったのですが、ここからはディスカッション形式でいきたいと思います。では、どなたかコメント、ご質問などございますか。

一般A：最初の説明時に矢野先生の資料を読ませていただきましたが、文章的にとっても面白かったです。動物と人間の関係をうまく捉えられており、動物と人間の関係性が端的に現れているのが、子ども向けの動物絵本と知り関心致しました。人間というのは、元々動物なわけで、人間の中の動物性というものを殺してしまうと、人間は人間でなくなってしまうわけで、人間というの

は、動物性の上にうまく動物性を積み上げるというか、組み立てて初めて本当の人間になれる。そういう意味で、動物をうまく子どもの中に植えつけるというか、動物の力を子どもに与える、ここがとても大事だと思いました。新しい驚きでした。私は、ペットを飼うことが苦手なのですが、現代人は今動物性を失ってきており、その欠乏から動物を飼う人が出てきているのではないかと感じました。新しい気づきでした。

一色：ありがとうございました。これについて何かございますか。

矢野：今日の話の中心を受け止めていただきまして、ありがとうございます。今のお話とつなげて、少し話を付け加えたいと思います。現在、アニマルセラピーがいろいろな形でなされていますが、なぜ動物と触れることがセラピーになるのかという問いは、今日の話とつながっています。有用性の世界では、役に立てるために世界のなかからコントロール可能な部分を選択的に選び、そこに働きかけることによって目的を実現しますが、そのようなことをつづけていると、世界全体との交流を失い、意識は孤立化し断片化してしまいます。この意識の孤立化・断片化によって、世界も人もたんなるモノのように感じ、もはや生き生きとしたものとは感じられなくなります。意識の孤立化・断片化は人を苦しめますが、人は自意識からのあざむきがない優美な動物に触れることで、断片化した心に統合が生じ、生命的な力が呼び覚まされます。アニマルセラピーが可能なのはこのような原理によってです。現在、日本のペットの数というのは、とんでもない数になっていますが、多くの人が無意識のうちにこのような心の統合を求めているものだろうと思います。そのため動物が手段化されてしまい、手放しでよいこととは思えない事態も起こっています。簡単に片がつく問題ではありませんが、この講演が動物性なるものを考える契機になればと思います。

一色：今日は、本学に併設されている甲南保育園の中村園長も来て頂いております。何かコメントいただけますでしょうか。

中村：甲南保育園の中村と申します。私も今日お話を伺って、全くその通りだと思ったことがございました。それは、こちらの世界とあちらの世界というお話がありましたが、あちらの世界に支えられながら行ったり戻ったりすることで安心して成長していくという言葉がとても身にしみ、自分自身も体感しながら、子どもたちに絵本を読んでやりたいと思いました。一方、同じ仕事に携わっております武藤先生のお話も共感するところがたくさんありまして、動物と子どもたちが似ている、共感するところがたくさんある、体感することも、動物の様子を見て解りやすいというその4つのことを考え合わせながらお聞きしていたのですが、このことが、自分を子どもたちが動物に置き換えて表現をする。大人もそうかもしれませんが、表現しやすい自分ではできないことも動物に置き換えることで、表現することができるのかなと感じました。大人もそうか

と思ったのは、神話の世界でも、やはりたくさんの動物がでできます。それが、神と恐れられたり、自分たちの力の象徴になったりというような様子を見ていると、やはり人間と動物は引き離せないものがあるのだなと思って聞かせていただきました。どうもありがとうございます。

一色：どうもありがとうございます。子どもたちは動物に置き換えて、そこで子どもたちが表現をできるのではないかという部分ですが、矢野先生、武藤先生いかがでしょうか。

武藤：動物に置き換えて表現をするということが、いま一つイメージがつかないのですが、どういったことでしょうか。

中村：置き換えてといいますか、自分が人間としてはなかなか出来ないことも絵本の世界のように、動物になぞらえれば、自分を変えて表現することができると感じました。

武藤：多分、違うかもしれませんが、おまごで動物になってのびのびした気分を味わったりとかそれから、動物の絵本を読んでもらってそれを追体験することによって、自分が動物になった気持ちで勇気をもらったり、楽しさをもらったり、考える機会をもらったりという意味で、自分ではできないことを動物の力を借りて実際にやってみるということはあるのかなと思います。

一色：矢野先生、『かいじゅうたちのいるところ』ですと、そのところにずっとはまり込んでしまったら、帰って来れなくなってしまうたら、それはどうなるのでしょうか。今、中村先生がおっしゃってくれた、自分を置き換えて少し違った自分を出せるようなところが、絵本の中ですともっとその中に行くような気がするのですが、その辺りはどこかでセーブをした方がいいのでしょうか、しない方がいいのでしょうか。

矢野：うまく先生のお話を捉えられたがどうか分かりませんが、『かいじゅうたちのいるところ』は、アメリカで発売されたときに、内容を巡って議論になりました。ベッテルハイムという学者が、これを子どもに読ませると危ない本だから読まさない方がよいと言った話が残っています。先生はよくご存知だと思いますが、子どもにとって深い絵本がもっている力みたいなもので、子どもによっては怖いところまでいく可能性はあるだろうと思います。先に紹介しました『おなかのすくさんば』もそうです。この絵本は最初発売されたときには、子どもが怖がるというクレームが出版社に来たようです。私はこの本がたいへん気に入っていて、『動物絵本をめぐる冒険』（勁草書房）という本を書いたときに、表紙の絵をこの絵本から取らせてもらいました。片山さんにお礼状をお送りしたら、動物たちは男の子をペロッと舐めるだけで帰るけれども、本当は食べられる予定だったというハガキをいただきました（詳細は太陽別冊『絵本の作家たちⅡ』で読めます）。最終的な作品ではやはり食べられずに戻ってきます。この絵本は『かいじゅうたちのいるところ』

と双壁で、とても深いところまで子どもを連れていく可能性があって優れているのですが、どちらも最後には子どもが戻るつくりになっているのが、よいところだと思います。

娘がまだ小さかったときに、自分で作った物語を語ったってあげていた時期があります。一緒にお風呂に入りながら、「今日お父さんが学校から帰るときにペンギンに会ったよ。ペンギンがお父さんの前を歩いていたんだ」といった話をします。それで娘は「それからどうなったの」と聞きます。「それで終わり」と答えると、怒ってしまいました。それでは子どもの物語のパターンにはならないのです。子どもには子どもの物語の展開への期待がある。「ペンギンが無事に家に帰りました」とならなくてはいけない。子どもが物語りの構造を理解するようになって、元の世界に戻るということが基本的な原理であることに気づいているからです。それは子どもが安心を求めているからです。ですから、行った子どもは行ったままになってはいけない。やはり戻らなくてはいけない。冒険でも旅でも迷子でも、「元に戻る」というのが小さな子どもの物語の鉄則です。本はある深さを作るけれども、子どもの本は深すぎてはいけない。深く作っても戻ることによって安心させないといけないのだと思います。

一色：それに対して、子どもがある深さまで行って戻ってくる。今、子どもがゲームとかに結構深みにはまってなかなか戻らないという状況があります。絵本については、そのようなセーブが効いているけれども、効いていないものについては、戻ってくる必要があるということですね。

矢野：コンピュータゲーム世界というのは、私には経験がなくによくわからないのです。どれぐらい子どもに本当に深い世界を子どもに開いているのか、また可能性として開いていくことができるのか、その評価には自信がありません。ただ電子ゲームはある一定の年齢になったから始めればいいので、小さい子どもの頃から、外で遊びたいと思わないほど刺激的で面白いゲームを与えてはいけないと考えています。幼児の成長のことを考えると、ゲーム的なデジタルの世界に早くから参入するのではなく、アナログ的な身体が実際にものに触れていく遊びの方がよいでしょう。その意味でいうと、絵本は電子ゲームのように一人で受動的に完結することはできず、ページをめくる行為や読んでくれる人の声に関わっているので、とてもアナログ的なメディアです。

ただ、ゲーム世界もいろいろな可能性があるもので、最初から駄目だと否定することはできません。それというのも、人類というのは、メディアの発展を通して、自身の経験の在り方を作り変えてきているからです。例えば、初めて文字が生まれたときのことを考えてみる。文字が生まれることによって、人の経験の仕方は大きく変わりました。知識や記憶の在り方が大きく変わります。また印刷術の発明により、本が一般的に印刷されるようになってからは、本の世界が人の経験を大きく変容させています。音読からも黙読への読み方の変化だけでもとても大きなものです。写真・映画の発明は人間の映像世界を開いているわけで、知覚の在り方を変えていきます。現在のコンピュータ世界がこれからどれほど人間を変化させていくかについては予断を許さない状態ですが、もはや否定することなどできないことはいうまでもありません。ゲーム世界の可能性を肯定しなければいけない。しかし同時に、ゲーム世界の子どもの世界への浸食によって、失われる経験のことを考える必要がある。特に基本的な経験を欠い

ている幼児期には、自分で判断できるわけではないので、親や保育者はできるだけアナログの遊びを選ぶ方がよい。幼児教育が感覚教育を重視してきた理由でもあります。電子ゲームをするよりは、砂場で遊ぶ方がよい。

「砂場」というのは、とてもよくできた媒介物（メディア）で、もし、子どもの教育についてのノーベル賞があるとしたら、砂場を発明した人がノーベル賞ものだと思います。子どもを森に連れていく、自然のなかに連れていくのが一番いい教育だという人がいます。しかし、幼児が実際に自分の身体で自然と向かい合うことができる場所というのは、そんなに広いわけではない。優れた導き手がいれば、いろいろ発見することができるかもしれませんが、でも幼児の力で掘り返すことができる場所など、自然のうちにはそれほどあるとは思えません。しかし砂場ではそれができます。子どものために作られた人工の「自然」だけれども、子どもをどこまでも深い形で想像の世界を生み出していくことができる自然です。そのようなものが、幼児が自分の力であちらの世界に安全にしかもどこまでも行くことのできる優れた媒介物なのです。このような優れたメディアを創造し、適切に配置していくのが、幼児教育にとって重要です。家に戻ればテレビも見るとし、ゲームもするのだから、幼稚園や保育園ではテレビなど見なくてもいい。むしろ他の子どもと一緒に遊ぶことで初めて体験できるような深い遊び世界に子どもを導くことの方がよいと思います。それを工夫することが、保育・幼児教育では大事ではないかと思います。

一色：ありがとうございます。では、どなたかいらっしゃいますか。

一般B：大阪から参りました。私が最初に就職した学校が、聴覚障害児の教育の場でした。50年ぐらい前では、先生がお書きになった図が私たちの新任研修の時に何度か説明されまして、こちらの世界というのは、言葉の世界なのだ。言葉の世界というのは、人間の世界である。人間だから言葉を持っている、言葉を持っているのは、口話法で、手話法はあちらの世界で言葉を失っている世界である。言葉を失っている世界は、動物の世界である。だから、君たちは、聴覚障害者を言葉の世界に引き戻さなければいけないと、言葉の世界に引き戻すということは、手話の世界を否定することであり、口話法の世界が唯一聴覚障害児教育の唯一の方法であると教えられたわけですね。今、先生のお話を聞いて、言葉を持っている世界の方が優位であって、あちらの世界、動物の世界は少し一段下がった段階にあるのかと話を伺いながら思ったのですが、今障害児教育は、手話も一つの言葉だという形で、50年程前の考え方とは変わってきていますが、こちらの世界とあちらの世界の図を見ながら、50年程前を振り返りまして、やはり、言葉を持っているこちらの世界の方が有利であると心の中にかすめるところがあるのですが、その辺りはいかがでしょうか。

矢野：誤解があつてはいけませんので、まず、第一に手話というのは、音声言語と違う形で言語世界を作り出しているのです、手話の世界も言葉の世界です。ですから手話の世界もこちらの世界としてこの図では理解します。それから、2番目にこちらの世界とあちらの世界というのは、「人

間中心主義的な意味の世界」と「世界と連続する動物性の世界」と言い直してもいいのです。このとき「動物性」というのは、世界と一体になって世界に触れる体験、命に触れるような体験のことです。ですから、ここでは「動物性」という言葉には、否定的な意味はまったくありません。

こちらの世界が結局本当の世界で、あちらの世界は偽の世界のように思われるかもしれませんが、そうではありません。どちらもリアルな世界です。そしてこの二つの世界を行き来をしている運動が「人間」と呼ばれているものです。ですから、こちらの世界のためにあちらの世界があるわけではない。両方の世界を往還することで、人間というものは、健やかに生きている。子どもだけでなく、大人にとってもそうです。仕事だけで生きているという人がいたら、それは仕事のなかにあちらの世界がある人だろうと思います。手仕事をする職人のなかには、毎日同じ仕事をしながら、仕事に熱中し我を忘れ、仕事が糧を得るためのたんなる手段ではなく、そのこと自体に喜びを見出す人がいます。素材と出会い、素材との身体的交流を通して一体化する瞬間を生きる人です。そういう手仕事をしている人は、仕事のなかで二つの世界がうまく結びついているので、わざわざ仕事以外のことをする必要がないのです。

しかし、多くの人是一方で仕事をし、他方で仕事でないことをする。それは「趣味」(遊び)と呼ばれたりしますが、仕事より価値が低いわけではありません。そういう二つの世界の運動のなかに人は生きていて、その運動の振幅のなかで、どれだけ深く両方の世界を作っていけるかが、人生の課題なのです。子どもの場合だったら、どこまでもこちらの世界の人間として社会的に有能な発達をすること、他方でどこまでも深く命に触れて生きていくこと、これが課題です。私がこの世界に存在するということは、単に社会のなかであるというだけではない。別にクラスの友だちが自分を認めてくれようってくれまいと、自分には自分の固有の生命世界がある。そのような確信は、あちらの世界とのつながりをもつことによって生まれます。二つの世界を往還するダイナミズムのなかを、大人も子どもも生きていて、その運動の幅を小さくさせることなく、どこまでも大きく作っていけると、人生も楽しくまた深くなるのだらうと思います。

一色：聴覚障害児の人も、今、矢野先生がおっしゃったようなあらゆる世界、命に触れるような経験みたいなものは、もちろんされていたでしょうか。

一般B：私が最初に就職した聾学校の中では、所謂、口話法というのが、唯一の世界であって、言葉の世界である。だから、言葉を持っていないのは、動物の世界なのだという考え方が非常に強かったので、言葉がない世界というのは、動物の世界にいるものだ。動物の世界は人間ではないのだ、人間より劣るものだ。だから聴覚障害者は、言葉がないから人間より劣るものだという考え方が非常に強かった時代です。最近、手話が非常に復権して参りました。テレビなどでも手話通訳の方が出ていたり、手話というのは一つの言葉なのだという形になってきておりますので、手話というのも一つの言葉で、こちらの世界だという今のお話のような考え方が、今の聴覚障害児教育の中では主流になってきているのではないかと思います。

一色：どうも、ありがとうございます。当然、矢野先生のおっしゃる命に触れるようなことというのは、また手話とは別のところで、そのような経験をしているというように考えられますね。ありがとうございました。では、次の方どうぞ。

一般C：大阪から参りました保育士の者です。今日は興味深くお聞きしました。矢野先生の図示された、こちらの世界、あちらの世界を便宜上、A、Bとしましたら、子どもたちの遊びの中で、遊びの構造というお話をされましたが、時間的・空間的に往還することで、子どもたちはいろいろなことを体験していくのですが、それが幼児期から小学生へと大きくなるにつれて、やはりB（あちらの世界）がどんどんと縮小されてしまって、A（こちらの世界）が大きくなるので、B（あちらの世界）の体験を意図的にしていくことが大事であると思うのですが、その時にこの図が、A（こちらの世界）がB（あちらの世界）の中に含まれているということに二重性を生きるというか、先ほど武藤先生も仰られていましたが、私も大事だと思っており、実は人間が大自然の中で二重性を生きているということを自覚していく、最終的には、そこに気がついて大事に生きていくことが人間にとって本来の人間性に気づいていくのではないかと、それがとても大事なのだと本日、気づかせていただきました。小学生に対し色々な語りをしているのですが、やはりB（あちらの世界）の体験がとても大事なことなのだと改めて学びました。ありがとうございました。

矢野：幼少連携ということで、幼稚園と小学校教育とをどう接続するかが課題になっています。小学校の先生からみると、幼稚園の教育は子どもを遊ばせているだけではないかと評価され、なかなか幼児教育が理解されない。小学校に入学したときには、イスに座って授業を聞く訓練をしておいて欲しいという話がされたりします。別に小学生・中学生になっても、子どもにはあちらの世界との関わりがなくなるわけではありません。当然のことながら、学校教育においてもなくなるものではありません。

小学校教育のなかで、あちらの世界との関係が一番明確に出てくるのは、音楽や図画工作かもしれませんが、他の教科もまた関わっているのです。国語教育を取りあげてみましょう。なぜ国語教育の教材に詩もあれば小説もあるのか。国語教育はただ正確に相手に意見や情報を伝えるための言葉を教育しているわけではありません。言葉の世界の奥行きは、喩やリズムによって作られる詩や現実にはありえないものまで生み出す仮構の物語を、味わったり作り出したりする能力と密接に関わっています。このメタファーとか比喩を作ったり理解する能力は、ごっこ遊びのコミュニケーション能力と基本的に同じ能力なのです。文章を単に字義どおりに読んでいるかぎり、詩や物語は読むことも楽しむことも解釈することもできません。同様に、字義どおりの理解では、土の団子はどこまでいっても、土の団子のままです。土でできた団子を、あたかも本物の団子であるかのように、食べる「ふり」ができる、といった遊ぶ力が、詩や物語理解の言語能力を支えているのです。その意味で言うと、小学校も幼児教育と同じく両方の世界に関わっているのです。小学校の先生が、自分たちが教えている教科が、あちらの世界と関わった体験を根拠にしていることを知らないことが問題です。

ですから幼少連携は幼稚園の小学校化のことではありません。小学校が幼児教育から生命的な関わりの重要性を学んでいくことでもあります。自分たちが教育しているその基盤が、幼児教育のなかで遊びとして作られていることを認識することでもあります。そして、小学校教育の課題は、あちらの世界との関わりを小さくすることなく、教科のなかでより一層深めることにあることを知ることです。物語の体験がより深くなるためには、国語教育できちんと文章が読め、漢字も覚えなないといけない。文章のなかの指示語「それ」が、一体何を指しているかを読解できなければ、正確には読めない。ですが、物語がまず面白いと思える体験は、幼児のときに学んでいる。物語の面白さの体験は幼児教育のなかにあるのです。

武藤：先ほどの二重性ということで思ったのは、子どもの遊びというのは、決して無用なものではなくて、保育の現場で言えば、子どもの遊びというのもこちらの世界にも含まれるし、遊びの特性から言えばあちらの世界というのも含まれる。それが二重性ということかと思って、遊びはゲームなどの娯楽ではなくて、子どもはやはり遊びを通してこそ、考える力も養いますし、自分の身体を鍛えたり身体を育てたりということもしますし、想像力も養いますし、また、友だちと遊びの中で出会って、社会性というのも遊びの中で育てるものだと思いますので、子どもの遊びがあちらの世界だけに存在しているものではなくて、こちらの世界と重なったもの、それも包括した一つの円にあるものかと先ほどの話で考えました。

それから、絵本にとっては行って帰ってくるというのはとても大事で、行って帰ってこれるからこそ、お話の世界を楽しめるのだと思うのですが、子どもにとっても大人にとっても、例えば日常生活の中で、行って帰ってくるところは、あちらの世界でもいいのかと思います。私も仕事では、まだ園長になって2年目ですので、必死でこちらの世界で仕事をして、家に帰ったらあちらの世界ということで思いますし、子どもも行って帰ってくる場所がこちらの世界ではなくて、日常生活の中で、あちらの世界に帰ってくる。豊かさであったりとか、命の大切さであったりとか、そういう動物性の元に帰ってくるのも大切なのかと思ったり、有能な人というのは、こちらの世界で長けているだけではなくて、あちらの世界を豊かに持っている人こそ有能で、初めは冴えなくてもあちらの世界を持っている人が粘り強く、これから花開く素質があるのかと思って、こちらの世界で有能なだけで、あちらの世界を持っていない人は、折れやすいとか心が脆弱とかと思って、そのような連想をしていたら、あちらの世界、こちらの世界というのいろいろな考え方があって、面白いと思いました。

一色：他にいらっしゃいますか。

一般D：今、あちらの世界、こちらの世界という話題が盛んに出てきますが、武藤先生のお話を伺っている中で、少し感じたことですが、あちらの世界、こちらの世界というのは、幼児が動物になって、動物がまた幼児にというような往復の関係です。同時にもう一つは、幼児が動物になるという前提以外に、幼児とは動物である。本来幼児に限ったことではないのですが、人間とは動物で

あるという発想もあっていいのではないかと思います。現実問題としましては、人間中心主義的に、あちら、こちら、人間の世界、動物の世界、言語、無言語という方法論でやっていくのが現実の合理的なやり方なのですが、もう少し、根本的というか人間というよりも、命という次元でものを考えた場合には、これは一元化してものを考えるということも在りうるのではないかと思います。そういう点であちら、こちらということのもう一つ根底には、人とか動物でなくて、命という視点で論ずることができないかと感じました。もちろんこれは根本論であって、現実的、具体的なことではないのですが、幼児につきましても、やはり、0歳児から小学生まで、どの次元がそういう一元的に考えていいのか、或いは、二元的にあちらとこちらと考えた方がいいのかということもいろいろ研究課題になるのではないかと思います。

矢野：時間に制約があるため詳しい話ができず、初めから二つの世界があるかのように話しましたが、私が考える基本原理も、二つの世界の分化以前の動物性＝連続性からはじまるものです（少し雑駁な言い方を許していただければ、西田幾多郎の主客未分の「純粹経験」をイメージしていただければよいです）。元々の出発点は、分裂以前の生命的統一ですが、その動物性＝連続性が否定されて、主と客という形で分かれたものとして発展していくのが人間化への道です。「こちらの世界」とは、意識によって世界と自分とを区別する世界です。しかし、この意識の世界は、有用性（労働）の原理にしたがって、手段－目的関係に支配されているため、世界の事物化をもたらします。同時に、意識の方にも孤立化・断片化をもたらします。そこでもう一度、その有用性のあり方を否定することで（役に立たせるはずであった時間とエネルギーを無用なことに惜しげもなく使い果たす＝遊び・蕩尽・贈与）、一端分かれたものが、溶けてしまう体験を生起させます。「あちらの世界」とは、そのような体験のことを指しています。その体験は、正確には最初の「動物性」のあり方とは違うものになるのですが、原理的には主と客に別れていない次元に再び立ち戻るのです。

「生命は生命である」と言うだけでは、生命に生じる自発自展の分節化を説明することができないので、生命からはじめ、それがどうして否定されて分節化するのか、そうしたものがどうしてまた再度否定されて、生命そのものに溶けていくのかを、論理として説明することが理論的課題となります。命からはじまり、命へと帰っていくのでいいのではないかと考えられるかもしれませんが、それだとなぜこの世界がこのようなあるかがうまく説明できないので、分節化した世界の説明を中間に入れておく必要があります。分節化した生命が再び一元的な命へと帰っていく、生命のダイナミズムを具体的に説明したいというのが、基本的なモチーフです。そしてこのダイナミズムを人間存在の根本事象として捉えたときに、教育の事象をどのように捉え直すことができるかが教育人間学の課題となります。難しい話になってきましたが、理論としての詳細な説明については、拙著『自己変容という物語』（金子書房）、また『贈与と交換の教育学』（東京大学出版会）を参照いただければと思います。

一色：今日は興味深お話をありがとうございました。特に動物という人間とは違った生命を見る

ことによって自分自身を認識するというか、人間の鏡となる動物という他者を見ることによって、自分が人間であるということを、認識をするお話、とても興味深かったです。単純な質問なのですが、「おなかのすくさんぽ」ですが、例えば、他のピーターラビットとか、ミッフィーなどの色彩が多くて明るくてわかりやすいものに比べると、全体がモノトーンで暗い感じがします。示唆には富んでいるけれども、何となく暗い。絵本を見せた時の子どもの反応を知りたいのです。他のわかりやすい絵本に比べて、このような本を読み聞かせた時の子どもの反応はどのようなのでしょうか。

武藤：子どもは明るい絵本も好きですし、このような絵本も好きです。ただ、条件としては、色彩を抑えてあろうが明るかろうが、どれもきちんとした絵本であることが基本としてあれば、色彩を抑えてあっても明るくても、子どもは本物の絵の力に共鳴してしっかり見ています。『もりのなか』にしても、大人が見ても本当にわくわくする。それは絵の力、絵本の力だと思います。

一色：子どもに生命というより命を開く動物絵本を、たくさん読んであげることが大切です。本日の資料はとても詳しく矢野先生が作っていただきました。その資料を読ませていただくと、この絵本論に留まらず、ここには哲学、文学、歴史学、宗教学、人類学とか心理学そういったものも動物の問題の中に織り込まれているということを感じました。そういうことを総合して子どもの問題を考える、子ども学の講演会にも合ったテーマであったと思います。今日はどうもありがとうございました。